診療室

獣医学の学位（獣医学博士）取得における貴重な経験

中本裕也[†]（㈱KyotoAR，㈱日本動物高度医療センター）

2011年9月30日，山口大学において山口大学大学院連合獣医学研究科（以下，本大学院）を含めた大学院の秋季卒業式が実施された．社会人として大学院へ入学していたため，私自身は仕事等の都合により参加することはできなかったものの，4年間の努力がようやく実ったという思いで非常に感慨深い気持ちであった．これを機に，大学院修了過程の中で得られたこと，特に入学当初には予期していなかった貴重な経験について記述したいと思う．これにより，後に続く方や，今現在，大学院への入学を検討されている先生方の一助になればと考えている．

思い起こせば4年前の2007年10月1日に，本大学院へ第一期秋期の学生として，入学した．大学院への入学を志したのは，物事に対しての「論理的な考え方」を学びたかったためであった．併せて，自分が培ってきた手持ちのデータを，「形ある成果」にしたかったためであった．

本大学院は，山口大学を基幹校として平成2年4月に構成4大学（鳥取大学・山口大学・宮崎大学・鹿児島大学）で設置され，西日本唯一の獣医学系大学院であった．大学院では主指導教官からの研究指導に加え，特別講義・特別演習・特別実験・共通ゼミナール（4年間の在学中に3回の参加が必須）などを履修し，4年間で計30単位を取得する必要があった．また，修了に要する条件としては，学位論文提出時にPub Med・カレントコンテンツに記載されている雑誌あるいは日本獣医師会雑誌への論文2報の掲載もしくは受理が必須条件であった．

この修了規定の中で予期せず貴重な経験が得られたのは，共通ゼミナールであった．この共通ゼミナールは，大学院構成大学の持ち回りによって3泊4日の合宿形式で毎年夏に開催されるものである．面白い点は，「合宿形式」ということだった．社会人として通常の業務を行っている中で，「合宿」を行うということは経験なく，非常に新鮮だった．

共通ゼミナールにおける貴重な経験のキーワードは「交流」と「英語」であった．「交流」とは，留学生を含む背景の全く異なる大学院在籍学生との接点が持てたということである．共通ゼミナール開催時には，日中の講義だけではなく，夕食時に学生と教官を含めた交流時間が設けられていた．ここでは，幅広い年齢層の，しかも小動物から大動物に関連した多種多様な職種の方々と交流することができた．これは，普段の生活だけでは得られない貴重な経験であった．大学院入学の目的，それぞれの研究内容，将来どのような仕事に携わって行きたいかなど，個々の立場を踏まえた様々な意見や考えを聞くことができたのは非常に貴重であった．大学院1年目で初めて参加した際には非常に憂鬱だったものの，学生交流によって知り合いが増えるにつれて，翌年の開催が非常に待ち遠しくなっていった．3度目の最後の参加時には，今後はこのような機会が無くなってしまうことに物悲しささえ感じていた．

もう一つのキーワードである「英語」だが，これは共通ゼミナールが「英語漬け」の日々ということだった．日中の教官による講義だけでなく，各人の研究テーマの進歩状況などの発表や質問・返答の全てが基本的に「英語」で行われていた．「基本的に」と記載したのは，私のように英語が不得意な学生に対しての配慮として，日本語への翻訳なども所々で織り交ぜていただいていたためである．このため，理解ができなくて消化不良になってしまうこともなく，普段と異なった環境を楽しむこと

中本裕也

—略　歴—

2005年　山口大学農学部獣医学科卒業
同　年　京都府おざわ動物病院に勤務（～2011年）
同　年　京都動物医療センターに勤務（～2009年）
2007年　山口大学大学院連合獣医学研究科入学
2009年　神奈川県日本動物高度医療センター非常勤勤務（～現在）
同　年　京都府KyotoARに非常勤務
2011年　京都府KyotoARに常勤勤務
同　年　山口大学大学院連合獣医学研究科卒業

† 連絡責任者：中本裕也（㈱KyotoAR）
〒613-0036　久世郡久御山町田井新荒見208-4　☎0774-39-7413　FAX 0774-39-7412
E-mail : dioinvalhalla@yahoo.co.jp

ができた．このような状況も，普段の生活の中では経験として無かったため，非常に貴重であった．

その他の楽しみとして付け加えると，それまでに訪れたことのない土地に行く機会が持てたということだった．私は宮崎・鹿児島・山口において開催された共通ゼミナールに参加したが，宮崎や鹿児島にはそれまでに訪れたことが無かったため，とても良い機会となった．

大学院の4年間で得られた経験は非常に貴重だったと今更ながらに感じている．それは，当初学びたいと考えていた「論理的な思考」だけでなく，様々な背景の大学院在籍学生が持つ多様な考え方を，入学時は予期しなかった「交流」によって得ることができたためだった．このことにより，入学当初は予想だにしなかった幅広い見識を得ることができた．博士号を取得した今，これをゴールとせずに新たなスタートとして捉えている．大学院時に得られた貴重な経験を踏まえ，これからの獣医学に対して幅広い視野を持って様々なことに取り組んでいきたいと考えている．

最後に，大学院への無謀な挑戦を許可し色々な面で支えてくれた家族，研究などによって勤務できない際も暖かく見守っていただいた職場の院長や同僚のスタッフの方々に，この場を借りて，深謝する．